

自然観察について



山内美子

はじめに

幼児期は play age 幼児期と呼ばれるように、幼児の一日と就学児の一日の差異は、遊びと仕事（勉強、手伝い）の区別がついていないことである。「遊び」は興味のおもむくままに振舞えばよいが、「仕事」は必ず「責任を果す」「成就する」ことが要求される。また就学児の遊びは気分転換であるが、幼児のは保育者の手伝いでも遊びの一環であるから、幼児に何かを課す場合には、「仕事」にならないように注意したい。すなわち強制的に描画、製作を完成させようとしなくて、楽しみつつ、クレパス、粘土、色紙、言語、身体動きなどで自己表現ができるように環境を整備するように努力したいと思う。特に自然物を相手に遊んだ場合は、その時の感興、観察した事項を何らかの方法で表現させるのはよいことであるが、

無理強いをすると将来、理科嫌い、図画嫌いの弊を残すようになる。描画、製作を通じて次回の観察計画を樹てるようにしたい。

ルソオの言に「自然にかえれ」とあるが、自然は慰安の場であり、文化発祥の場でもある。また自然には因襲的制度はないのである。この大自然を幼児の遊びの中に取り入れると科学的教養が身につく以外に、情操をも豊かになるので、「チューリップ病」の如きマンネリズムは消失し、時には神経症の治療（遊戯治療）もしていることがある。

(A) 幼児の自然観察における三大特徴

a アニミズムと古典文学ならびに絵本

アニミズムとは人間以外の動物、植物、天空にある諸物体、乗り物、楽器などは人間と同じく生命があり、感情を抱いているとの自己中心的な考え方である。このような汎心論的傾向は現代の幼児には随所でみられる⁽¹⁾ことであるが、未開民族の文学書にもみられ、近代のサンブツ歌にもみられる。例を挙げる

『(前略) 復有^{またあり}草木成能^{くさきよもなるともいふこと}言語^{ことば}』⁽²⁾

『我^{わが}背^せ兒^こ爾^れ吾^{わが}恋^こ居^る者^は吾^{わが}屋^や戸^の之^の草^{くさ}佐^さ倍^{ばい}思^し浦^{うら}乾^か米^{めい}』⁽³⁾

『今はむかしの人なる藤井延近がかたりしは、法恩院といふ山伏のおくどほりにて、みだけより熊野へ大みねとほりにこえけるをりに、其の道にゆきくれて、かねて山伏のためにつくりおける、小屋のあるにいりてふしたるに、その小屋のあたりの木草石のたぐひの、物いふをききつとかたりきとぞかたりし、(後略)』⁽⁴⁾

『東の山は紫の 着物きかへてきげんよく 今朝もをかしく私等の 朝寝するのを笑うてる』⁽⁵⁾

現代の散文学ではアニミズムは排撃している。幼児の観察教育でもアニミズム的表現は慎しみたい。絵本もこの種の物は与えない方がよいと思う。特に観察を主にした場合は注意を要する。擬人化した物語の絵本でも絵の表現は、本来の姿を描いた物を与えたい。絵

本をみる幼児が頭の中でアニミズム的に想像するのはよいが、おとなが幼児にこびへつらったり、おとなの観察主観を幼児に押しつけることのないようにしたい。幼児は現実と空想の区別がつかないのであるから、観察の時間のみ科学教育をすると、一部の幼児は混乱を来したり、アニミズムの崩壊がおくれたりしないだろうか。擬人化した物は紙芝居、絵本より、口演童話でもって幼児各児各様に想像させるのがよいと思う。

b 人工論と宗教

人工論についての調査⁽⁶⁾をみると、幼児は山や川は親、庭師、佐官、失対人夫、神様が造ったように思っている。小学一年生は男女平均六四%が神様と答えている。造物主神が高校生になると再び出てくる。がこれは人工論でなく宗教的態度と思われる。理由は「鬼は今も実在しているか」というのに対して「我が心」「人間の心」に住んでいると答えている。聖書⁽⁷⁾に「元始に神天地を創造たまへり」とあるが、宗教教育は細心の注意を払わないと人工論の解消に悪影響を及ぼすのみならず、神経症⁽⁸⁾にする恐れがある。

c 全体と部分との関係を有機的、総合的に考えない

幼児に汽車の絵⁽⁹⁾を描画させると、煙が出ているのに線路と車輪、車輪と車体がそれぞれ離れている。この状態は保育者のも同様

であった。保育者は幼児が興味を持って描くものはよく研究し、合理的な箇所をみつけたら、先ず賞めた後「○○を捕り(摘み)にしよう」「××を見にいこう」と自由に遊ばせながら観察させた後「好きなように描かせるがよい」⁽¹⁰⁾と思う。要は気軽に観察して経験を豊富にして何らかの方法(描画、製作、遊戯、童謡)で表現させたいと思う。気軽に観察する態度を養成するには園内に観賞用の植物、野草をも栽培したいと思う。植物があれば昆虫は寄って来る。池には魚類を飼育したり、犬猫、小鳥、鶏を飼育すれば「チューリップ病」は治癒できると同時に、幼児創作の童話、振りつけが生まれるのである。

以上のように幼児の三特徴を徐々に打破していくには是非自然観察をさせたい。その際「あれをみよう」「何がみえるか」「どうなっているか」「どう思っか」と次々命令を下したり、発表を強いないで、正確に、詳細に、先入観にとらわれないで観察する態度を、あせらずに養成したいと思う。

(B) 観察教育の留意点

a 顕微鏡的教育について

「全姿の観察なくして、花粉、鱗粉、回虫卵、昆虫の口器などを顕

微鏡とか拡大鏡で観察させることを顕微鏡的教育という」と筆者は定義づけている。

顕微鏡的教育は保育者の興味が主で、幼児にとっては盲人の象ぐりに等しく、観察した直後は興味を抱いたかの如くみえるが、忘却は早いように思える。

観察教育は保育者が準備をしてやるのではなく、幼児自らに捕獲、採集をさせ、それを肉眼 ↓ 拡大鏡 ↓ (顕微鏡) と観察させたい。幼児自らに材料を蒐集させると、生態を観察すると同時に Spencer ⁽¹¹⁾ がいうように、幼児の過剰エネルギーをある程度発散させるので、いよいよ観察する場合には落ち着いて、事実より直接字ぼうとする態度になり、創作童謡も口ずさむようになる。

顕微鏡々検をさせる場合は、年間通して幼児の玩具として自由に持って遊ばれるようにしてあるのならよいが、蝶の鱗粉をみせた後は、幼児の眼にふれない所へ保管するという態度はよくない。たとえ玩具としてある場合でも、幼児自身がピントを合わせようとしてデッキグラスを破壊した場合が問題になる。またそれがうまく処理できたとしても幼児自身がピントを合わせようとするのは眼を酷使することになるし、保育者が合わせた場合は幼児の眼に必らずしも合うとは限らない。

幼児期の観察能力の発達段階は静観であって、物を正確に把握させることが主で、それに附随して既有観念を徐々に修正していくよ

うに保育したい。

b 観察教育と道徳教育

両者が矛盾しないようにしたい。昆虫を捕って虫籠へ入れたが、すぐ飽きて、餌もやらず、放してもやらすそのまま放置したり、時には翅や脚をむしりとりったり、触角をつみとったりすることがある。また無意味に花瓣をばらばらにしたり、枝から折ってすぐ投げ捨てたりしないように、情意の世界と矛盾や対立をなくするようにしたい。飼育の昆虫や蛙、金魚、小鳥が死んだ場合には墓を建てるといふように、知、情、意が一体となった保育でありたい。いわば全人教育という立場で環境をより正しく理解させたいと思う。

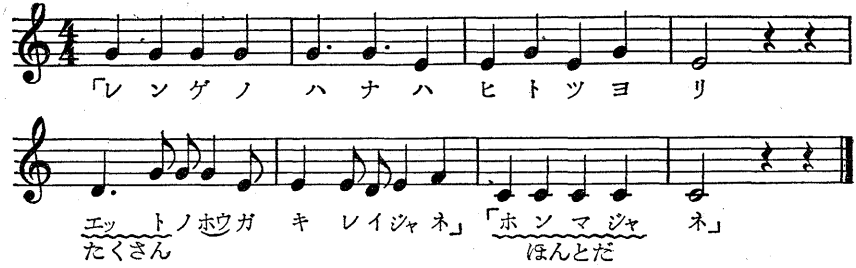
結 び

自然観察教育は「ものしり」を造るのではない。印刷物で知識を注入することではなく、人間育成の一環として遊びを通じて、科学的な見方や考え方を身につけさせることだと思う。特に重視したいことは「自然」を正しく観察する態度の養成だと思う。正しい観察の累積の上に立てば、経験的事実を比較したり、共通点を抽象することが可能になる。更に自然観察を通じて印象を深め、経験を豊富にすると同時に情操をも豊かになるのである。

自然観察教育の事例報告

学内の学友会活動として子ども会（幼稚園、保育園へいってない幼児が対象）の部を設けていた頃の報告である。「蝶々」「チューリップ」の唄を歌って近くの山へつれていった。黄色のタンポポの花を見つけて摘みとったH君が、下のような童謡をくちずさんでいた。「H君お唄つくることお上手ね」と賞めると好奇心の強い幼児たちは「先生ナアニ」と側に来たので「今ね、H君がミルクのお唄をつくったのよ、H君みんなと一しょに歌いましょう、ミルクミルク……」「先生、ミルクノデル草、サガシマショウ」「ドンナ草ニ、ミルクガアルノ？」今まで跳びはねていた幼児たちは働き蜂





の如くあの花、この花と探し出した。そしてミルクの出る草はたくさんないことが判ると同時に、他の花と異なっていること（菊科）も理解された。「タンポポに似たお花をみつけたら皆に教えて上げましょう。一つだけお約束しましょう。それは花をみる時に、花びら一つだけとってみるのですよ。きれいに咲いているお花を汚くしないようにしましょう」（以後ヒマワリ、キク、ダリヤと幼児なりに分類していった。）

一同が休稽している時にK子「アノ花ナンテイウノ?」「れんげですよ」K子が節をつけて歌うとG君が後を引き受けて歌った。

一同で合唱すると、はにかみ屋のG君もさすがに嬉しいとみえ、眼を輝かして歌っていた。これで自信を得たのか、G君は活潑に口

答表現をするようになった。

へ引用文献

- (1) 山内美子 幼児の教育 五八卷一〇号九頁
- (2) 日本書記 卷二ノ一 七一四年
- (3) 万葉 卷十一 十裏 七五九六年
- (4) 大祓詞後々釋 卷九 一七九六年
- (5) 本願寺学務部 サンブツ歌 一三頁 一九一九年
- (6) 山内美子 桃太郎童話を通じてみた日本児童の精神発達について第二報 未発表
- (7) 新旧約聖書 創世記 一頁
- (8) 山内美子 駐留軍基地の小児の実態調査 民族衛生二四卷三号 一九五八年
- (9) 山内美子 幼児の観察教育について第一報 広島女子短大紀要 九集 一九五八年
- (10) 霜田静止 児童問題新書 九九頁 一九五二年
- (11) Spencer, H.; The principles of psychology, 1873

*

*

*